

「GIP/GLP-1 受容体作動薬使用患者における HbA1c と身体状況の変化について」

独立行政法人労働者健康安全機構 山口労災病院

上田愛実¹⁾ 谷山景香¹⁾ 佃ひまり¹⁾ 内田聖子¹⁾ 勝原優子¹⁾ 松原淳²⁾

¹⁾ 栄養管理部 ²⁾ 糖尿病内分泌内科

【目的】当院では、2型糖尿病治療中の肥満患者で食事療法を含めた治療に無関心であった患者が、持続性 GIP/GLP-1 受容体作動薬のチルゼパチドの導入による体重減少をきっかけに、生活習慣の改善に積極的になり検査データも改善した事例がみられた。同じ薬剤の使用でも、患者によって HbA1c の改善や体重減少の効果はさまざまである。そこでチルゼパチド使用患者に対する栄養食事指導（以下、指導とする）方法を検討するため、行動変容ステージによる HbA1c や身体状況の変化の実態を把握することを目的とした。

【方法】対象は、2023 年 5 月から 2024 年 11 月までの間、チルゼパチドが処方された 2 型糖尿病患者 33 名（男性：14 名、女性：19 名）とした。方法は、①チルゼパチドが処方された対象者に指導を行い、InBody770 を用いて体組成を測定した。②2024 年 11 月直近の指導時に再度体組成を測定した。①と②の体重、BMI、体脂肪量、そして除脂肪量のデータを比較した。さらに食事療法や減量に関する行動変容ステージが、HbA1c の変化、体組成の変化と関連しているかを検討した。統計解析は、EZR(64-bit)を用い、Kruskal-Wallis の検定、多重解析を行い、5%未満を統計学的に有意差ありとした。なお、本研究の実施については独立行政法人労働者健康安全機構山口労災病院生命倫理委員会の承認を受けた（承認番号：Yro-ri-2024-21 号）。

【結果】HbA1c の改善がみられた患者は 30 名であった。改善がみられなかった患者 3 名は、食事療法に関する行動変容ステージが無関心期から準備期であった。また減量に対しても無関心期から準備期であり、運動を日々の習慣として行うことができていなかったと考えられる。さらに食事療法、減量に対する行動変容ステージが共に無関心期であった 1 名は、体重が 4.4kg 増量していた。

対象者を減量に対する行動変容ステージで分類した場合、維持期の患者は、無関心期および関心期の患者と比較して、体重と BMI が有意に減少していた。（ $p=0.003$ ）

【考察】GIP/GLP-1 受容体作動薬は、血糖改善のほか、体重減少などの効果が期待できるとされている。しかし体重や BMI を有意に減少させるには、減量に対する患者の行動変容ステージが無関心期および関心期では不十分であることが示唆された。また今回の GIP/GLP-1 受容体作動薬による減量は、脂肪量のみならず除脂肪量の減少も見られた。このことから今後の指導では、除脂肪量の減少を最小限にして脂肪量を効果的に減量していくことが求められる。

【結語】体重減少効果が期待される GIP/GLP-1 受容体作動薬が処方されている患者の指導では、まず対象者の減量に対する行動変容ステージを評価することが必要である。そして一人一人の生活環境などに合わせ、維持期の行動変容ステージへ導くことが効果的な減量については HbA1c の改善に繋がる。